兵庫教育大学　研究紀要　第62巻　2023年２月　pp.113-118

教師の非言語コミュニケーション能力を高めるために
－マジックと教育の関係に着目して－

To Improve Teachers'non-verbal Communication Skills：Focusing on the Relationship between Magic and Education

内　海　勝　也*
UTSUMI katsuya

本論文では，教師がコミュニケーション・スキルとしてのマジックを身につけると非言語コミュニケーション能力の向上につながるのではないか，という可能性を示唆する。マジックと教育との関係性は、①理科と数学の授業に採り入れることで、知的好奇心を呼び起こす、②学級経営や授業に活かす、③好奇心の芽生え、④英語教育への可能性、⑤創造性を養う、という５つの観点に整理される。そして、６つ目の観点として本論文では、教師の非言語コミュニケーションの向上、という点に着目する。マジックは知的な人を対象とした芸能であり、観客を驚かせたり、楽しませたり芸能の一種である。芸能の一種としてマジック（奇術）として考えることは、教師の力量形成に寄与する可能性がある。

キーワード：非言語コミュニケーション，マジック，マジシャン
Key words : non-verbal communication, magic, magician

Ⅰ　はじめに

本論文は，教師がコミュニケーション・スキルとしてのマジックを身につけると非言語コミュニケーション能力向上につながるのではないか，という可能性を示唆するものである。筆者は19歳から，マジック研究会に所属し，マジックの腕を磨いてきた。マジックをしていると筆者が話すと，「手先が器用なんですね」と言われることが多かった。マジックの上達の上で必要な要素は「手先の器用さ」なのか。手先が器用なだけではマジックは上達しない。

このことに対してゆうきとも（2011）は、「指先の器用，不器用といった問題ではないということです。あえて言えば頭の器用さ，柔軟さが必要なわけで・・・実際に人の前で何かを表現する場合には，見た目だけの器用さなどではなく，状況の的確な認識能力と説明能力，基本的なコミュニケーション能力といったことの方がはるかに大切なのです。」と言う[(1)]。

また，藤原（2010）は，「10秒マジック」を提案する中で，10秒に込めた意味を次のように説明する[(2)]。

なぜ“10秒”なのか。〈中略〉マジックをさまざまなコミュニケーションでの“つかみ”として活かすためです。授業の時，司会の時，講演の時はもちろん，それ以外でもスピーチを頼まれたり，自己紹介の場面など数多くあるでしょう。そのような時，“マジックの魅力＋10秒というコンパクトさ”がとてもピッタリだからです。

つまり，奥田（2000）が言うように，「マジックはコミュニケーションの手段」[(3)]である。そのため，本論文では，マジックを「コミュニーション・スキル」の一つとして考える。そして，コミュニケーションの中でも非言語コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）に注目して，マジックと教育の関係について考察を行う。

Ⅱ　教師の非言語コミュニケーションについて

コミュニケーションは大きく２つある。すなわち「バーバル･コミュニケーション（言葉による伝達）」と，「ノンバーバル･コミュニケーション（言葉以外の伝達）」である。「ノンバーバル・コミュニケーション」である、ことば以外の「ことばならざることば」（ノンバーバル・ランゲージ）にはどのようなものがあるのだろうか。マジョリー・F・ヴァーガス（1987）によると，次の９種類が，人間のあらゆるコミュニケーションに寄与するところが，大であることが明らかになっている[(4)]。すなわち，①人体（コミュケーション当事者の遺伝因子に関わるもろもろの身体的特徴の中で，なんらかのメッセージを表すもの。たとえば性別，年齢，体格，皮膚の色など），②動作（人体の姿勢や動きで表現されるもの），③

＊兵庫教育大学附属小学校 教諭
令和４年10月18日受理

目（「視線の交差（アイ・コンタクト）」と目つき），④周辺言語：パラランゲージ（話しことばに付随する音声上の性状と特徴），⑤沈黙，⑥身体接触（相手の身体に接触すること，またはその代替行為による表現），⑦対人的空間（コミュニケーションのために人間が利用する空間），⑧時間（文化形態と生理学の二つの次元での時間），⑨色彩，である。

しかし，学校教育では「言葉」だけが，「伝達」の手段として教えられる，と竹内(2005)は指摘する[5]。また，石田（1999）は，次のような指摘をする[6]。

> 教育において非言語的コミュニケーションの持つ重要性は，言語的コミュニケーションそれ自体を見つめ直し，表層的な「ことば」が飛びかうコミュニケーションそれ自体を見つめ直し，表層的な「ことば」が飛びかうコミュニケーションから教師と子どもが「自分のことば」で語り合うコミュニケーションへの展望を切り開く契機を見いだせることにある。教育が，教師と子どもとが向かい合い，言葉を交わし，意志を交流しあって展開される以上，このような視点が今後ますます重要になってくると考えられる。

学校教育において、非言語コミュニケーションが非常に重要であることがわかる。この重要性について河野（2009）は，非言語的コミュニケーションが巧みな教師は子どもたちに自らの権威を示すことができ，同時に親和的な授業の雰囲気にすることができる，と言う[7]。

以上のように非言語コミュニケーションは重要であることは言うまでもない。本論文では教師が非言語コミュニケーション能力を高める方法論として，マジックに着目する。

Ⅲ　そもそも“マジック”とは何か

瀬島（2008）は，「奇術とは，合理的な方法によって観客の知覚を誤らせ，不思議の世界を体験させることを目的にした芸能である」（「ニューマジック」1972 No.2）という厚川昌夫のマジック（奇術）の定義を紹介した上で、次のような説明をする[8]。

> まず，合理的な方法とあるが，これはマジックを構成する種（タネと呼んでいる）のことである。マジックは非合理な現象を体験させるものであるがその裏には原因となる合理的な根拠があるという意味である。したがってマジックは原因を隠して現象だけみせるわけである。さらに「知覚を誤らせ」とは人がどのように感じるかということである。不思議の世界とは，因果論的世界観の基に成立する非因果的世界のことである。〈中略〉マジックにはタネがつきものであるが，〈中略〉タネ，つまり原因がわからない現象を見せるものであること。そして必ず人間の知覚が介在し，見る人によって必ずしも同じ現象を見ているわけではないこと。そして地球上で生じる説明可能な物理的現象を当然のこととして受け入れている知的な人を対象とする芸能である，ということになる。

また，熊田（2012）は，認知心理学にもとづきマジックを「マジシャンが手技や道具に付属した仕掛けを用い，言語的あるいは非言語的な手がかりによって観客の注意を誘導し，物理学的，生物学的に不可能な事象があたかも生じたように観客を知覚させ，またそれによって観客を驚かせたり楽しませたりする芸能の一種」と説明する[9]。

マジックは知的な人を対象とした芸能であり、観客を驚かせたり、楽しませたり芸能の一種である。このような芸能の一種としてマジック（奇術）として考えることは、教師の力量形成に寄与する可能性がある。

横田（2011）は，教師の専門性を考える上で，教師（teacher）という語呂に合わせて，７つを紹介している[10]。すなわち，① Technician（技術者）：豊富な教育技術を使いこなす指導力，② Entertainer（芸人）：遊芸巧みに子どもたちをのせるユーモア力，③ Actor（役者）：状況に応じて演じ分ける柔軟な対応力，④ Counselor（相談役）：子どもの悩みに耳を傾けて，助言するコミュニケーション力，⑤ Helper（支援者）：特別支援を要する子への適切な支援力，⑥ Enchanter（魔術師）：不思議さや感動を引き出す演出力，⑦ Reader（易者）：悩みや困惑を看取る観察力，である。

このように教師の専門性は多岐にわたる。この中でも Entertainer（芸人），Actor（役者），Enchanter（魔術師）としての教師の専門性はマジシャンから学べることが多いのである。

Ⅳ　マジックと教育の関係

さて、マジックと教育の関係はどのように語られてきたのだろうか。まず，理科と数学との関係がある。後藤（1998）は，「理科」は暗記科目ではないとし，「日々の親子のふれあいの中で，子どもに科学の不思議さ，楽しさ，面白さを知ってもらうための材料」として科学手品を紹介する[11]。また，野呂・工藤（1999）は，「理科離れ」を防ぐために，「生徒の知的好奇心を呼び起こすため，授業の一部に科学マジックを取り入れてきました」という[12]。

次に，学級経営や授業に生かす，という視点である。前述の横田は，以下のように述べる[13]。

> マジックは，いろいろな場で効力を発揮します。学

級経営だけでなく授業，保護者会，職場の会合でも，役に立ちます。手品を取り込むだけで，驚きや笑いに包まれ，空気が和らいで，不思議と物事がうまく運ぶようになります。何より，マジックができるというだけで，子どもからも保護者からも同僚からも一目おかれて，人気者になること必至です。しかも芸を極めることは，マジックで教材を提示するなどの指導力，マジシャンになりきる役者としての対応力，話術で引き込むためのユーモア力，不思議さを引き出すための演出力・・・といった専門性をいくつも伸ばすことになり，教師修業にもなります。

そして，マジックを授業に生かす視点として，①集中させる，②教材を提示する，③観察眼や思考力を育てる，を紹介する[14]。また，学級経営に生きるマジックの魅力と効能（メリット）として，①空気が一瞬で変わる（急に目を輝かせ，集中して，笑顔になる），②ネアカになる（目の前に不思議なことが起こると，最初は驚くが，次第に笑顔が溢れる），③信頼関係が増す（人間関係にも遊びが重要），④親和性が増す（何かひとつの文化を共有できると，仲間との親和性が増して，集団性が高まってくる）も紹介する[15]。

以上は，マジックの紹介をメインとする一般向けの書籍の中で，マジックと教育の関係を語っているものである。次に，マジックと教育に関係する論文を紹介する。筆者が探し当てたものは５本の論文である。順に紹介する。まず，河合（1991）では，小学生，幼稚園児を対象として手品の手ほどきと実演をした後に，アンケートを実施して，手品（マジック）の効用についてまとめている[16]。河合によると，今回の調査では94%の子どもが「マジックを見ることが好き」と答え，その理由を，マジックの持つ楽しくて不思議な現象が，子どもの好奇心を強く呼び起こすのではないかと考えられる。「子どもたちに“なぜ”，“どうして”の疑問を繰り返し問いかけることによってその対象に魅力を感じさせ，好奇心が芽生え，自分でもやってみたいという気を起こさせることができる。現代の教育は，子どもに訴えることや，考えさせることが少なく，教育を焦るあまり一方的に教えすぎ，消化不良を起こさせる」とする。次に河合氏は，マジックに対する園児の反応について考察している[17]。この論文では「演者が子どもたちの心をつかむためには，さまざまな工夫をする必要である。内容の選択と工夫，演者の質的向上，環境の整備などを考慮して日頃からの積み重ねが大切である」とし，その具体的な例を以下のように挙げている[18]。

・子供が理解できる内容にする。
・子供が楽しめる種目を選び，それを工夫する。
・子供の心理を理解する。
・子どもの発育，発達の状況を理解する。
・演者の技術を高める。
・お話の仕方を向上させる。
・即興に対応できる能力を高める。
・表情，身振り，手振りなどの表現力を豊かにする。
・起承転結，変化など全体の流れ（構成）を考える。
・音楽，照明，衣装，舞台の背景などを効果的に使って，雰囲気を盛り上げる。

続けて，「成果の大小は，演じる側と見る側の相互の協力的態度の有無，強弱が大きく影響すると言えるが，しかし最も重要なことは，演者が子どもたちに対して「私はあなた方が好きです」という基本的態度を心底から持つことである」とする。そして，「教育・保育に面白さや楽しさを加えて子どもたちが楽しみながらいろいろなことを身につけていくような指導上の工夫が必要」とし，マジックを補助的に使い，教育的効果を上げるという試みは，今後の調査研究と実践活動によって少しずつその方向性を見いだすであろう，とする。また，「マジックを習得する過程において培われる話し方の技術，表現力，創意工夫，ユーモアセンスなどは，保育者としての資質向上の面でも役立つように思われる」とも指摘する[19]。

大学の英語教育の中でマジックを利用した実践経験を基にして，小学校英語教育の中にマジックを利用することの可能性を示唆しているのが，梅本（2010）である[20]。梅本は論文の中で「マジックとプレゼンテーション」について説明している[21]。

マジックはプレゼンテーションそのものであり，教員がマジックを練習することは即プレゼンテーションの練習となる。マジックのプレゼンテーションはある物体を単に見せて説明するというタイプのプレゼンテーション以上に会話の役割がより重要である。つまり，ことばによるプレゼンテーションがマジックの１つの肝である。教える側がマジックを行うことは常にプレゼンテーションを考えることとつながるので，物事をどのように伝えれば効果的かということにも思いが及ぶので，教育一般に対する訓練ともなる。

外国語活動に手品を導入することにで，教師と児童の間で英語を使ってのコミュニケーションをとることができる可能性があるとしたのが，石濱・薮下（2018）である[22]。この論文では，コミュニケーションの一つの手段として手品（マジック）を取り入れて，外国語活動における手品（マジック）のあり方を示している。平成23年度，年間36時間の外国語活動の中で13回の手品の活動を取り入れ，その授業の感想や手品（マジック）についてどう感じたかの「自由記述」の振り返り用

紙を用いて本実践の調査を実施している。児童の振り返りをキーワードで分類すると「楽しさ」「驚き」「面白さ」および「やりたい」にまとめることができた，とする。そして，手品の活動を児童は楽しいと思っているとし，そのため，手品を外国語活動に導入することで，児童の興味・関心を引き出すことができる可能性があるだろう，とする。本論文の今後の課題として，①児童数５，６年生 24 名であった。小規模校ではなく，様々な公立小学校の外国語活動の中で手品の活動を導入して，更なる手品の活動のあり方を検討する，②手品をとおしてコミュニケーションを促すばかりでなく，手品の活動をとおして考える力を育成してく。児童に手品の仕組みを考えさせるために，手品の準備を含めた教材研究・開発を進めていくことが求められる，の２点を挙げている。

さらに創造性を養うという視点からマジックと教育の関係を考察したのが深草（2017）である[23]。深草によれば，「手品の本質は，人間の持つさまざまな固定観念を利用すること」とする。

以上，マジックと教育との関係性は、①理科と数学の授業に採り入れることで、知的好奇心を呼び起こす、②学級経営や授業に活かす、③好奇心の芽生え、④英語教育への可能性、⑤創造性を養う、という５つの観点に整理される。そして、６つ目として本論文では、教師の非言語コミュニケーションの向上、という点に着目する。マジシャンにとってマジックそのもののスキルよりもプレゼンテーション能力，パフォーマンス能力が重要である。このマジシャンの能力を教師の指導力・表現力向上に生かすことができるのではないか。では、マジシャンはどのようにコミュニケーション・スキルを磨いているのであろうか。

Ⅴ　マジシャンから学ぶコミュニケーション・スキル

「近代奇術の父」[24] と呼ばれているフランス人パフォーマーのジャン・ウジェーヌ・ロベール＝ウーダン（1805-1871）は「マジシャンとは魔法使いの役を演じる役者である。」といったとされる。この言葉を紹介しているゲイ･ユンバーグ（2012）によれば,「マジックはアートであり，パフォーマーはアーティストである。そしてそのアーティストは，マジシャンの役を演じているにすぎない。ただしそのマジシャンという役には，演じる人によって様々なバリエーションがあるのだ。」ということである[25]。観客と直接コミュンケーションを取ることの可能性を追求してきたとして、ゲイは次のように述べる[26]。

観客と楽しくコミュニケーションを取るが，ステージに上がって行うことの最優先事項だった。演技の中の観客と面白いやりとりを出来る要素があれば，それはとても素晴らしいマジックだ。イギリスのコメディ・メンタリストであるジョン・アーチャーは，なぜメンタルマジックを演じているのかと問われ，次のように答えていた。「メンタルマジックは，観客と相互にやりとりをすることが出来，その過程でコメディを作り出すことが出来るからだ。」

また，氏は以下のようにもいう[27]。

マジックの世界では，「マジックの雰囲気」を作り出すことが出来る演者のことが評価される。ところが，我々は本能的に目に見えるものしか信じない傾向があるので，雰囲気といった曖昧な存在をなかなか理解したり，把握したりすることができない。先の「マジックの雰囲気」には，演者のコミュニケーション能力が密接に関係していると私は考える。〈中略〉生命の吹き込まれた人間性は，演者と観客による，その場その場でのコミュニケーションがあって初めて感じ取ることができる。

このようにマジシャンにとってコミュニケーション能力が重要であることがよくわかる。この能力を高めるために，「ステージ恐怖症を克服するための 10 の方法」を紹介している[28]。

①自分の演技をよく理解する。
②会場について十分に把握しておく。
③観客の情報を事前に収集する。
④緊張を和らげる方法を知る。
⑤メンタル・トレーニングを行う。
⑥「観客はあなたの成功を望んでいる」ことを肝に銘じる。失敗したり計画通りにいかなかったりしても自分から態度や表情に出さないようにしよう。自分が緊張していても，すぐに観客に伝わってしまうことはないので落ち着いて対処すること。
⑦言い訳をしない
⑧観客とのコミュニケーションに集中する。観客の一人をまっすぐ見つめ，笑顔を作るように努めよう。そして演技ができる場所があること，観てくれる人がいること，不思議な瞬間を共有出来ることなどに感謝し，その気持ちを正直に表現しよう。こうして自ら好循環を作り出そう。
⑨苛立ちや緊張をポジティブなエネルギーに変える。
⑩経験をたくさん積む。

このことは，教師が人前に立つためのアドバイスとも受け取ることができるであろう。また，人と人との絆を作り出すための「観客との関係を深める 10 の近道」も紹介する[29]。

①常に観客とアイコンタクトを取るように心がけよう。
②自分が発したジョークを観客が笑ったり面白がってくれたりしたら，それにきちんと反応しよう。
③客席から話し声が聞こえたら，その方向に顔を向け，気づいていることを知らせよう。
④会場で突発的な動きがあった場合も同様にしよう。
⑤観客の誰かに協力をお願いした場合は，その人の名前を覚え，頻繁に呼びかけよう。
⑥お辞儀をしたり「ありがとう！」と言うことで拍手をもらおうとしてはならない。
⑦「今，この場にいること」を共有できるような台詞で台本を書くこと。
⑧自分の考えや感情を表現するチャンスを見逃さないようにしよう。
⑨自分が話すときは相手の目を見て話すようにしよう。
⑩笑顔。

このことは，教師が子どもと関係を創る視点としても有効であろう。

スティーブ･コーエン（2007）は，「最高の自分をもって場にのぞむーコミュニケーション・スキル」として，信頼関係をつくりだす方法として，以下の７つを紹介している[30]。すなわち，①まず自分を信じる，②重要人物のように振る舞う，③的確な動きを身につける，④断固とした口調で話す，⑤三回くり返す，⑥自分を過信しない，⑦褒め言葉を返す，である。

以上、見てきたような、マジシャンのコミュニケーション・スキルの視点は教師の力量形成においても参考になる。このような舞台芸能としてのマジシャンと子どもたちの前で授業を行う教師の振る舞いの類似性を確認することができる。

６，おわりに　ー奇術教育の可能性

以上見てきたように，マジックをすることが教師の非言語コミュニケーション能力を高める可能性があることが示唆される。そして，筆者は教育活動にマジックを生かすことを，「奇術教育」と名付ける。以下，奇術教育の概略を提案する。奇術教育とは「奇術を効果的に活用して，不思議を楽しむ活動」である。奇術教育の目標は「知的好奇心をくすぐるとともに，コミュニケーションを活性化させ，自尊感情を劇的に高めること」。奇術教育の５領域を以下のこととする。①教師の子どもを惹きつけるためのスキル向上，②子ども同士をつなぐツールの獲得，③消極的な子どもへのアプローチ方法，④教師の表現力の向上，⑤家庭でのコミュケーション機会の向上。①では，学級開き，お楽しみ会，教師の威厳と関係がある。②では，学び合いの基礎を養う可能性がある。③では，自尊感情・学習性有能感を高めることが期待できる。④は，本論文でも考察した，身体表現による学習効果の期待である。⑤では，学校で覚えたマジックを誰かに披露したくなるはずである。身近な家庭に披露することで，交流が深まるのではないか。

筆者の実体験として，マジックの腕を磨けば磨くほど，大人数の前で話すことのスキルも高まっているように感じる。この実体験は，筆者のマジックの師匠瀬島順一郎氏から教えていただいた。今後は，教師の非言語コミュニケーションを高めるためにマジックを教師の力量形成にどのように位置付けていくのか，どのようなマジックをどのような方法で学ぶのが効果的か、などの実践的な研究が必要である。

注

(1)　ゆうきとも『ウケる手品』ちくま新書, 2011 年, ８頁。
(2)　藤原邦恭『笑劇！教室でできる 10 秒マジック』いかだ社，2010 年，２頁。
(3)　奥田靖二『スーパースクール手品』いかだ社，2000 年，３頁。
(4)　マジョリー・F・ヴァーガス（石丸正訳）『非言語コミュニケーション』新潮選書，1987 年，16 頁。
(5)　竹内一郎『人は見た目が９割』新潮新書，2005 年，19 頁。
(6)　石田渉「非言語コミュニケーション」恒吉宏典・深澤広明編『授業研究重要用語 300 の基礎知識』明治図書，1999 年，所収，116 頁。
(7)　河野義章「授業研究の要因」河野義章編『授業研究法入門』図書文化，2009 年，所収，11 頁。
(8)　瀬島順一郎「マジックと科学」『青淵第 713 号８月号』2008 年，財団法人渋沢栄一記念財団，所収 17 頁。
(9)　熊田孝恒『マジックにだまされるのはなぜか「注意」の認知心理学』DOJIN 選書，2012 年，14 頁。
(10)　横田経一郎『簡単 !! 手品で子どもを引きつける教室マジック 24』小学館，2011 年，２頁。
(11)　後藤道夫『子どもにウケる科学手品 77』講談社，1998 年，５- ６頁。
(12)　野呂茂樹 / 工藤貴正『先生はマジシャン　第１集』連合出版，1999 年，３頁。
(13)(14)　横田、前掲書、2 頁。
(15)　同，62 頁。
(16)　河合勝「教育に生かすマジックの実証的研究―その１」『江南女子短期大学紀要　第 20 号』1991 年 1 - ８頁。
(17)　同「教育に生かすマジックの研究―マジックに対する園児の反応についてー」『江南女子短期大学紀要第 21 号』1992 年，１頁。
(18)　同，10-11 頁。
(19)　同，11 頁。

⑳ 梅本孝「マジックを利用した小学校英語教育の可能性について」『静岡産業大学経営学部研究紀要環境と経営第16号第1号』2010年，1-10頁。
㉑ 同，3頁。
㉒ 石濱博之 / 薮下克彦「外国語活動の授業で手品（マジック）を導入する試みーコミュニケーションの手段としての手品（マジック）のあり方―」『鳴門教育大学研究紀要第33巻』2018年，119-131頁。
㉓ 深草正博「教育とマジックー環境問題に引きつけてー」『皇學館大学教育学部研究報告集第九号』2017年，1頁。
㉔ ゲイ＝ユンバーグ（翻訳米津健一）『オーディエンスマネジメント』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2012年，63頁。
㉕ 同，65頁。
㉖ 同，18頁。
㉗ 同，77-78頁。
㉘ 同，98頁。
㉙ 同，110頁。
㉚ スティーブ・コーエン『カリスマ手品師に学ぶ　超一流の心理術』ディスカヴァー・トゥエンティワン，2007年，56-79頁。

参考文献

・フロタマサトシ『奇術の中のパントマイム』THE NEW MAGIC，1972年。
・高木重朗『魔法の心理学』講談社現代新書，1985年。
・同『トリックの心理学』講談社現代新書，1986年。
・上野富美夫編『数学マジック事典』東京堂出版，1995年。
・エバーハード＝リーゼ（田代茂訳）『ファウンデーションズ』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2013年。
・ケン＝ウエバー（田代茂訳）『マキシマムエンターテイメント』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2013年。
・デビッド＝ケイ（滝沢敦・新城真知子訳）『ウケるキッズ・ショーの作り方』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2013年。
・ジェリー＝マグレガー / ジム＝ペース（滝沢敦訳）『レストラン・マジシャンズガイドブック』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2014年。
・トベアス＝ベックウィズ（滝沢敦訳）『ビヨンド・デセプション』株式会社リアライズ・ユア・マジックスクリプト・マヌーヴァ，2015年。